お姉さんが甘やかされる日常２

＊会社でのストレスが爆発し、部屋の前で泣いています口調も〈お姉さん〉から
〈私〉に変えているのも、弱っているのを表現するためです。

＊涙ぐんでる描写から始まる
指示がない場合は正面でお願いします

「はぁ…
わっ、えっえっと、すみませんすぐ退きます…ってなんだ君かぁ」

「君は今帰り？そう・・・今日もお疲れ様
すまないけど今日は私、君のお姉さんではいられそうにないよ」

「だってこんな泣き弱った顔して、その上服もびしょ濡れなんて・・・大人にもなって情けないよね」

「はぁ…君にはこんな姿見せたくなかったんだけどな
んんっ!?きゅっ急に抱きついきてどうしたの!? 別に嫌じゃない…むしろ嬉しい(ここ小声)」

「けど、君も濡れちゃうし、ここは廊下だからせめて家に入ってからにしよ
あっ、お姉さんの家でいい？
さすがに君の家でシャワーを借りるわけにはいかないし、着替えもしたいからね」

(扉系se)

「先にシャワー浴びてくるから、
ソファに座るなりベッドで横になるなり適当にくつろいでていいよ」

「あー…さすがにタンスとかは開けないでねじゃあ、入ってくるよ」

（扉se）

「ふーおまたせー、私も色々と落ち着けたよ
ごめんね、洗濯物から部屋の掃除までしてもらっちゃってどうしても今は自分でやる気になれなくて…」

「んー、ところでさっきはなんで抱きついてきたのかな？
もしかして私に対してその気があるとか」

「ふむ、私の真似？
あぁ、そうか
ごめん、気を遣わせたね」

「君にはそれほどまでに私が疲れているように見えるのか」

「よし、ならこうしようか
せっかくだし今日は君にお世話してもらおうかな大丈夫大丈夫、そんな困った顔しないで」

「さっき抱きついてきたみたいに
いつもお姉さんが君にしていることを、お姉さんにしてくれればいいだけだから
今日は…君に甘えたい気分なんだだめ？」

「ありがとう、君のそういうところ私は好きだよ
じゃあ今日は、お姉さんじゃない私をよろしくね」

＊ストレスによる幼児体育に近い感じです

＊ここからは甘える・上目遣いで話すような

（お姉さんは上目遣いで話しているわけではありません）

「ねーえー、ごはんまだー？
私お腹すいたー、もう待てないよぉ
えっ、プリンあるの!?食べる食べる！」

「普段から私にお世話されてるだけあって好みは把握済みというわけだ
別に酔ってないよ、飲んでないしぜーんぜん大丈夫」

「あっ、君今うざいなぁって思ってるでしょ
別にいいんだよ？嫌なら今からでも私がお世話するから
・・・ふむ、別にいいと」

「これは今日私が寝るまで続くから本当に嫌になったらすぐに言うんだよそれまでは
遠慮なく甘えることにするからね」

「次はねー、さっきみたいに抱きついてほしいな
恥ずかしいって君は何をいまさら(楽しそうに)」

「今日は私のわがままを聞いてくれるんでしょ？

だから、んっ(両手を出して抱きついてほしいポーズ)」

＊ここからは少し近めにお願いします

「何って、君からしてほしいんだけどなー

ふふっ、ありがとっ♡」

(しばらく息遣い・呼吸音)

「普段は君を甘やかすことばかり考えたから気付かなかったけど、これはたしかに落ち着くなぁ」

＊(心底安堵している様子)

「皆がやりたくなる気持ちも今ならわかる

あー、ずっと君とこうして抱きしめあっていたいよぉ」

＊ここからはお姉さんが卑下するパートです

「・・・君は、こんな私をみて幻滅しない？

だってこんなだよ？

だらしなくて人に迷惑をかけちゃう、今だって君に…気を遣わせてる」

＊元の位置でお願いします

「いいんだよ別に、正直に言ってくれて

君が思ってること全部」

「うん、うん…うん

そんなに言わなくてもよくない？」

「いや、言っていいって私が言ったんだけど、
そんなにあるなんて思ってなかったよ」

「あぁ、ごめんね まだ続きがあるんだうん、うん、っ気にしてるところを…
うん、あれっ次はなんか褒められている気がする

「以上か…結構あったね(苦笑)」

「ごめんね、頼りなくて…
けど、私なりに頑張ってきたんだよ?」

「それでも、また君があんなになるまで気付けなかったのが悔しくて」

「そんな気持ちになったことがないから、
どうしたらいいかわからなくなって」

＊〈いいかな→ありがとう〉の間で少し近づいてください

「だからもう少しだけ、君に甘えてていいかな
ありがとう、わがままでごめんね」

(深呼吸)

「頭、撫でてもらってもいいかな?
私がもういいよって言うまでずっと」

(呼吸音)3.4 回ほど

「手、おっきいね

私と違ってすごく頼りになりそうな感じ」
「明日からも君にお世話してもらおうかな
それならもうお姉さんは必要なさそうだし」

「はぁ…へっ泣いてる？
あはは、なんでだろう涙が止まんないや本当…なんでかな」

（ため息）

「あの……さ、私だってイラつくし、
ストレスが溜まることくらいあるよ、同じ人なんだから」

「それが自分でも気付かないうちにこんなに積み重なってたなんて・・・」「それで君に迷惑かけてちゃ元も子もないのに
ほんと…なにやってんだか」

（深呼吸）

「ごめん、落ち着くまでこのままでいさせて
・・・お願い（号泣、嗚咽あり）」

＊元の位置でお願いします。

「ありがとう、もういいよ大丈夫
まさか君にここまで弱みを見せることになるなんてね」

「君には散々遠慮しないでって言ってきたのに、
これじゃあ私も人のこと言えないな(笑ってます)」

「あー、すっきりしたー

久しぶりにたくさん泣いたから疲れちゃった(笑いながら)それに散々泣いたら眠たくなってきたな」

「まだ時間帯的には早いけど、お姉さんはそろそろ部屋に戻るよ」

「君のお世話をしたいお姉さんとしては、
これ以上君に優しくされるとお姉さんの立場がないよ」

「でも…ありがとね
次からはなるべくお姉さんも君を頼るようにするよ」

「だからそんな不安そうな顔しないでよ
あっでも次からはもっと上手くお世話できるように、お姉さんから技を盗んでよね
(嬉しそうに)」

「じゃあ、そろそろ行くよ
明日からは君の彼女としてお世話するから、よろしくまたね」